# Ⅲ　研究のまとめ

## １　指導事例についての考察

Ⅱ章で示した８事例を含め、１０の指導事例について、次のような観点からまとめた。

○児童・生徒が克服すべき課題や困難

事　例　の　ま　と　め

| | | 児童・生徒 | 事例の概要 | 困難な場面 | 通級指導学級での指導 |
|---|---|---|---|---|---|
| 小学校 | ＡＤＨＤに近い傾向が見られる | 指導事例１<br>小２年 | 落ち着きがなく学習が定着しない児童に対する通級指導学級の指導と在籍校での校内支援の充実により改善が見られた事例 | 明るく人なつこいが、多動で授業中離席が多く､学習が定着しない。特に、算数、国語では、教室を出て行く傾向が強い。 | 視機能訓練により見る力を高める指導、手指の巧緻性、運動機能の向上を図る指導がなされている。 |
| | | ※指導事例<br>小２年 | 落ち着きがなく自己コントロールが苦手な児童が、通級指導学級の指導により改善が見られた事例 | 本を読むのは好きだが、授業中に手遊びをしたり席を立ったりするなど落ち着きがない。気持ちを表現できず友達に手が出てしまうことがある。 | 話す、聞く、常に体の動きに意識を向ける、指示や説明に沿って行動する、読む、書く等の課題に応じたきめ細かな指導をなされている。 |
| | | 指導事例２<br>小４年 | 友達とのトラブルが多い児童に校内通級の利点を生かした指導を行い改善が見られた事例 | 集団参加への意欲はあるが、状況を判断する力や結果を見通す力が弱く、友達と適切に関わることができにくい。また、他児との学力差が大きくなりつつある。 | 自分の言動を意識させ、自己コントロールする力を高める指導、視知覚認知学習を取り入れた指導の他に、通常の学級への訪問指導を行っている。 |
| | ＬＤに近い傾向が見られる | 指導事例３<br>小２年 | 読み書きに困難がある児童に得意な面を生かした指導を行い学習意欲を高めた事例 | 植物や動物の知識が豊富だが、書字読字に課題があり、文字に対する抵抗がある。 | 得意な分野の学習を増やすとともに、目と手の協応動作や空間認知を高める指導を行っている。 |
| | | ※指導事例<br>小３年 | 書くことに困難がある児童が校内通級の利点を生かした指導で学習に意欲的に取り組むようになった事例 | 読む力はあるが、書くことが苦手でひらがなは鏡文字になることがある。集中が持続せず、目で文字を追うことができない。 | 目と手の協応能力を高めるため、なぞり描き・点結び・迷路・簡単な絵の視写・折り紙を繰り返し行っている。 |
| | | 指導事例４<br>小６年 | 対人関係の苦手な児童がソーシャルスキルを身につけて言語によるコミュニケーションがとれるようになった事例 | 基本的な読み書き計算はできるものの言語による交流が苦手である。自分から進んで行動することができず、友達ができにくい。 | 語彙、表現力、自分の気持ちの伝達、集団の中のコミュニケーションスキルについてきめ細かい指導を行っている。 |
| 中学校 | ＡＤＨＤに近い傾向が見られる | 指導事例５<br>中２年 | 注意の集中や読み書きに困難がある生徒が中学校から通級指導を受け始め改善が見られた事例 | 手先の操作性、動作を伴う学習は得意なものの、注意の集中、読み書きに困難があり、学習の遅れが大きくなっている。 | 基本的な漢字の読み書き、読書、ワープロの学習で基礎学力の向上を図っている。<br>自分の行動を振り返り、行動を修正したり、体験を通した対人関係の指導を行っている。 |
| | | 指導事例６<br>中３年 | 対人関係に困難があり不登校になった生徒が通級指導学級に通い人とのかかわりに改善が見られた事例 | 言葉で自分を表現したり、他者の気持ちを読みとることが苦手で、対人関係がギクシャクする。<br>学習の遅れはあまりないが、不登校状態が続いている。 | 教員が本人の気持ちを言葉で表して確認することを繰り返している。<br>グループ学習で相手の気持ちを読みとったり、伝える力を伸ばす指導を行っている。 |
| | ＬＤに近い傾向が見られる | 指導事例７<br>中２年 | 空間認知や対人関係に困難がある生徒に早期から適切な対応がとられた事例 | 早くからの対応で、成績も良く学校に適応しているが、数学の図形で落ち込みがある。はちまきがうまく結べない、人の気持ちがつかめない等の課題が残っている。 | 通常の学級において苦手な分野を取り上げ、個別指導をしている。<br>人間関係を広げるスキルの学習をしている。<br>得意分野を伸ばす指導をしている。 |
| | | 指導事例８<br>中３年 | 学習の遅れから不登校になった生徒が通級指導学級に通い自己表現力を付け意欲的な学校生活を送ることができるようになった事例 | 語彙が少なく、文章の読み取りが苦手である等、学習面の遅れがもとになって不登校状態になっている。<br>言葉で自分の気持ちをうまく表せない。 | 言葉による自己表現ができるようにする。<br>授業内容を最初に示し、見通しをもてるようにする。<br>自信がもてるよう、できることや興味のあるものを増やす。 |

※はⅡ章で示した以外の事例を示す。

○通級指導学級における児童・生徒の課題や困難に対応した指導

○通常の学級における個に応じた指導と指導上の配慮事項

○効果があった指導や今後の課題に関する考察

さらに、この表をもとに、通常の学級における指導の在り方ついての考察を行った。

と　考　察

| 通常の学級での指導 | | 考　察 |
|---|---|---|
| 個に応じた指導 | 指導上の配慮事項 | |
| 学習の流れを知らせ、見通しがもてるようにする。<br>描画や作業的学習など好きな学習を取り入れる。<br>課題のなぞり書き等を取り入れる。<br>10 ～ 15 分ごとに区切って取り組ませる。<br>評価カードを使って学習成果をほめ、自信を持たせる。 | 教室から飛び出すことが多いので、全校体制を作り、入ってよい部屋を決め、それ以外は行かないように指導した。<br>他児と同じ視点で指導し、区別のない対応を心がけた。 | 通級指導学級での専門的な指導と、通常の学級での個に応じた指導や配慮事項が相乗効果をあげている。<br>本児の学級における人間関係が安定していることが効果的な指導の基盤となっている。 |
| 毎時間、学習の始まりの段階に学習の準備を具体的に指示し、集中しやすくする。<br>できたときにタイミングよくほめる。<br>音読の量を自分で決めさせる。 | 指示はできるだけ簡潔に行う。<br>上手にできたときはクラスの友達と達成感を共有できるようにする。 | 通級指導学級での指導が効果をあげつつあるが、通常の学級での本児の生活にはまだ課題が残っている。通級指導学級での指導を参考に取り組んでいるところである。 |
| 内容的に理解が難しいものが増えているので個別の課題を用意して基本的な読み書きの力や計算の力がつくようにしている。<br>通級指導学級の教材も取り入れている。 | 座席を担任のそばにする。<br>担任との信頼関係を大切にする。<br>否定的な言葉かけをさけ、できたことを認めながら行動修正を図る。 | 訪問指導をはじめとする通級指導学級との連携により本児の安定が図られているが、この状態の維持のため全校体制が必要となっているのが現状である。 |
| 漢字練習はマス目の大きなノートを使用し繰り返し練習させる。<br>板書を写すときは概ね半分程度にし負担を減らしている。 | 生き物に詳しいという得意な面を学級で発揮させる。<br>苦手分野を他児にも理解させ、応援態勢を作る。 | 通級指導学級と通常の学級の指導がうまく組み合わさり、自信をもつことができるようになった。 |
| 授業の流れを授業開始時に説明し、板書しておく。<br>ノートはマス目の大きいものを使用し、書き始めにキャラクターで目印をつける。<br>漢字を覚えやすくするため、偏とつくりに分けたカードを用意する。 | 励ましたりほめたりし、自信をもたせる。<br>座席は前の方にし、声かけできるようにする。 | 校内通級の利点を生かし通級時間を柔軟に設定したり、通常の学級で習う漢字を前もって指導して、自信をもたせる等、連携を密にしていることが効果をあげている。 |
| グループの中で本児が孤立しないよう配慮しつつ、グループ単位で学習する機会を増やし、その中で成就感をもてるよう支援する。 | 皆の前で発表する機会を工夫する。 | 一人でできることが増え、自信をもちつつあるが、さらに効果をあげるためには、通常の学級、通級指導学級、保護者の一層の連携が必要な状況である。 |
| 人の話に集中し、黒板をよく見てノートに書き写すよう指導する。板書を写しやすいように書く場所に目印をつける。<br>通級指導学級での課題を通常の学級の自主学習に位置づけて指導する。<br>予定表に反省事項を書けるようにし、振り返ることができるようにする。 | 座席を本人の意志を尊重しつつ前の方に設定する。<br>理解できる場面で発言する機会を作り、自信が持てるようにする。<br>得意な科目（美術、体育）での活躍の場面を増やし認める。 | 通級学級での指導の効果が通常の学級でも現れている。通常の学級でも指導の工夫をしているが、教科担任制の壁もあり、個に応じた指導の充実については今後の課題である。 |
| | | 通級指導学級での指導により、次第に心を開き、進路についても話すようになっている。不登校の事例であるが、通常の学級における不登校傾向の生徒の指導にも参考になる内容である。 |
| 学習に遅れはなく、適応しているように見えるが、本人は空間認知に課題があることを認識しており、この点について担任と教科担当が共通理解をして指導をしている。<br>紐を結ぶ、図を描く等の動作については援助や配慮をしている。 | 自分の苦手を表に出せる安心感のもてる集団つくりをしている。 | 早期から課題に対応した指導がなされ、現在も通級指導学級と通常の学級の連携のもとに指導が行われているため、生き生きとした学校生活を送っている。しかし、今後も課題に配慮した対応が必要である。 |
| | | 他のＬＤ傾向の児童・生徒と同様な配慮に基づく指導が効果をあげている。早い段階からの適切な配慮ある指導が必要であると考えられる。 |

## 2　通常の学級における指導の在り方について

指導事例を基に、通常の学級における指導の在り方を考察し、(1)～(4)のようにまとめた。

### (1) 指導内容の在り方について

指導内容を次の①～③のように大別し、10 の指導事例についてその実施状況を分析した。

①児童・生徒の人間関係や情緒の安定を図る指導や配慮
②授業場面での細かい配慮に基づく学習支援
③児童・生徒の課題や困難を克服するための指導

① 児童・生徒の人間関係や情緒の安定を図る指導や配慮は、通級指導学級はもとより、通常の学級においてもすべての学級でなされている。

事例から通常の学級における指導の考え方や実施されていた指導内容等をまとめると次のようになった。

〈基本的な考え方〉

・他児と区別のない対応をする。　・担任との信頼関係を大切にする。

〈自信をもたせる〉

・励ましたりほめたりし、自信をもたせる。　・得意分野を発揮させる。
・否定的な言葉かけをさける。

〈学級経営〉

・上手にできたときはクラスの友達と達成感を共有できるようにする。
・発言をする機会を作り、自信がもてるようにする。
・自分の苦手を表に出せる集団作りをする　・苦手分野を他児にも理解させる。

〈全校体制〉

・教室から飛び出すことが多いため、全校体制で入ってよい部屋を決め、それ以外は行かないよう指導する。

② 授業場面での細かい配慮に基づく学習支援についても、全学級で取り組まれている。通常の学級での取り組みは次の通りである。

・学習の流れを知らせ、見通しがもてるようにする。
・座席を担任のそばにする。
・指示はできるだけ簡潔に行う。
・評価カードを使って学習成果をほめ、自信をもたせる。
・全教員が課題や困難を共通理解し、授業に臨む（中学校）。

③ 児童・生徒の課題や困難を克服するための指導は、通級指導学級ではすべての学級で計画的に実施されている。しかし、通常の学級においてこのような指導内容が具体的に示されている例は少なく、しかも、高学年になるほど少なくなる。通常の学級において、具体的に指導内容が示されている例は次のとおりである。

・描画や作業的学習など好きな学習を取り入れる　（小学校２学年）
・課題のなぞり書き等を取り入れる　（小学校２学年）
・音読の量を自分で決めさせる　（小学校２学年）
・漢字練習ではマス目の大きなノートを使用し、繰り返し練習させる（小学校２学年）

・板書を写すときは概ね半分程度にし、負担を減らす　（小学校２年生）

・漢字を覚えやすくするため、偏とつくりに分けたカードを用意する　（小学校３年生）

これらの児童・生徒の課題や困難を克服するための指導がなされている通常の学級について、改めて①児童・生徒の人間関係や情緒の安定を図る指導や配慮、②授業場面での細かい配慮に基づく学習支援の二つの視点から実態を考察した。すると、児童・生徒の課題や困難を克服するための指導がなされている通常の学級では、この①②の指導が効果をあげており、児童・生徒の課題や困難を克服するための指導は、上記の①②の指導の成果の上に成り立っていることが分かった。このことから、通常の学級における指導の在り方として、次のように提言をまとめることができる。

児童・生徒の人間関係や情緒の安定を図る指導や配慮、細かい配慮に基づく学習支援を充実させることが、児童・生徒の課題や困難を克服するための指導の基盤となる。

(2) 児童・生徒の課題や困難をとらえる視点について

ＡＤＨＤの傾向が見られる児童について、巻末資料の「学習等の実態把握チェック表」を用いて分析を行ったところ、いくつかの事例でＬＤの傾向を併せ有していることが分かった。児童・生徒理解においては、児童・生徒の実態に即して広い視野からとらえることが求められる。

(3) 早期発見の重要性について

事例７の生徒は、早期発見による適切な指導がなされたため、現在、学力面での遅れもなく生き生きと学校生活を送ることができるようになっている。その一方で、小学校段階で十分な指導がなされない場合は、中学校段階で不登校になる可能性があることを事例６、事例８から読みとることができる。効果的な指導のためには、早期からの適切な指導が重要である。

(4) 通常の学級と通級指導学級との連携について

事例１、事例３では、通常の学級と通級指導学級が児童・生徒の課題を共通理解し、その上で役割分担を明確にしている。また、事例２では通級指導学級担任が訪問指導をしばしば行い、連携を密にし、効果をあげている。このことから、次のような提言をまとめることができる。

通常の学級は、確かな指導の基盤のもとに、通級指導学級等と連携しつつ専門性に裏付けされた指導を工夫・実施することが重要である。

## ３　成果と課題

今回の研究は、通級指導学級を窓口に事例を収集し、通常の学級に在籍する児童・生徒の学習障害、注意欠陥／多動性障害に対応した教育的支援の在り方を探った。その結果、すべての指導は、児童・生徒の人間関係や情緒の安定を図る指導や配慮、授業場面における細かい配慮に基づく学習支援の上に成り立っていること、通級指導学級等との連携が大きな役割を果たしていること等を見出すとともに、具体的な指導方法を事例をもとに示すことができた。

しかし、通常の学級における課題はさまざまであり、緊急な課題も少なくない。その課題解決のためには、今回得られた知見に加え、さらに具体的な指導法を明らかにすることが必要となる。

今後は、通級指導学級を窓口とするだけでなく、通常の学級そのものを窓口に事例を収集し、有効な手だてを見つけることが重要な課題となっている。